

「モデル小説」からみる
プライヴァシーの近代

日比嘉高

第6・7回

島崎藤村、写実小説のジレンマ 2 「旧主人」を読む

小説家藤村の実質的な処女作「旧主人」。

その作品世界へ分け入ろう――

1 「旧主人」を読む

「旧主人」 『新小説』一九〇二年二月。「藁草履」と並ぶ島崎藤村の実質的小説デビュー作。

1・1 作品のどの側面に注目して読解するか？

- ・藤村の経歴や「千曲川のスケッチ」などとの関係
- ・都市／地方
- ・語られるもの（衣装） 語られないもの（金銭）
- ・人物論、語り手論

1・2 「旧主人」の「女」像、「男」像

課題1 お定の人物造形について、大切と思われる箇所を指摘せよ

課題2

綾の人物造形について、大切と思われる箇所を指摘せよ

課題3

おつぎさんの人物造形について、大切と思われる箇所を指摘せよ

課題4

作品中で示される「女」論について、大切と思われる箇所を指摘せよ

課題5

作品中で示される「男」論について、大切と思われる箇所を指摘せよ

整理

2 「旧主人」の発禁

「旧主人」は、発表約一ヶ月後に発禁処分を受けた。当初は作品末部の「接吻くつぽ」の描写が原因と言われたが、少し後には、恩師の家庭を描いたことに対して『信濃毎日新聞』の記者であった山路愛山が立腹し、それが発禁へとつながったという説が出された。この作品は、藤村の恩師である木村熊二の家庭をモデルにして描いたとされる。いずれも真偽は不明のままである。

2・1 藤村の反応

■引用1 ■藤村書簡、田山花袋宛、一九〇五年十一月九日

「[...] 信州諸新聞紙の報により、又馬場〔孤蝶〕兄よりの通知により、『旧主人』の法に触れたるを確かめ申候。はじめて産れたる双児〔旧主人〕と「藁草履」の一は世の光を見ること僅に一週にして死せり。笑ふべく憐むべきは小生が新しき旅路の発足に御座候はずや。」

2・2 原因についての噂

■引用2 ■編集局同人「近刊合評 旧主人」『文芸界』一九〇二年二月

「併しあすこの所が内務省のお役人様の目に触れて、発売禁止になった為め噂はパット全国に広がって、日頃小説嫌ひの誰れ彼れまで、我もくくと大騒ぎをして却つて多数に読まれたさうです。作者、書肆、寧ろ以て榮とすべしではありませんか。兎角『臭いものに蓋』主義の結果は得てかういふ滑稽を演ずるものですて。」

■引用3 ■「風俗壊乱の小説」『文章世界』一九〇八年五月

「島崎藤村の『旧主人』がやられたのは、其の終りの所に、男と女とがキツスする様を明らかに描いたからだといはれるが、併し、この頃、山路愛山が文芸講演会でしゃべつたり、『国民』の『書齋独語』で書いたりした所に依ると、其の条下よりは寧ろ、この作が、旧の主人の事を書いたといふので、不埒なツ、といった訳であつたらしい。作物が風俗を壊乱するといふよりは、作者が忘恩であるといふ實際道徳から来た訳なんだ。」

2・3 「旧主人」のモデル——木村熊二

【資料1】 臼井吉見『近代文学論争』（筑摩書房、一九七五年）

【資料2】 青木なを「木村熊二」

（『島崎藤村事典』明治書院、一九七二年一〇月）

木村熊二

3 藤村の小説作法——モデル・写実・フィクション

▼ 写実への志向

【資料3】 島崎藤村「序」『緑葉集』春陽堂、一九〇七年一月）

▼ 実際には写実と仮構が入り交じっていた

【資料4】 島崎藤村「新片町より」『文章世界』一九〇九年四月、「モデル」と解題し『新片町より』佐久良書房、一九〇九年九月

↓ 「旧主人」も、実際は妻の話が交ぜてあつた

【資料5】 臼井吉見『近代文学論争』同前

↑

ここに「モデル問題」が発生

書かれることそのものへの怒り / しかも事実と異なる

「旧主人」の語り手であり、かつ視点人物であるお定。下女にもかかわらず、鋭く的確な描写を重ねる彼女に対しては、同時代評からすでに彼女が下女らしくない、という指摘がされていた。お定はいったい、一体どのような人物なのだろうか。

- ・綾、おつきさんを〈反復〉しつつ、最後に回避した下女
 - ・佐久女↓小諸の女↓佐久女？
 - ・男女の機微について、一家言もつほどの経験をした女
 - ・以上のような、経験を積んだ女の回顧的で「判定的」な語りが「旧主人」の語り。
- かつての主人夫婦の失敗を語りつつ、男女関係についてのある種の教訓を示すことが物語の目的といえよう。